保守革命論の教育思想

―総合雑誌 Deusche Rundschau に見られる教育論の展開―

清　水　禎　文

本論文は、1930年代から40年代のドイツにおける教育学説の展開を解明するための基礎作業として、ワイマール時代から保守革命論と総称される思想運動とその一端を担った総合雑誌『ドイツ展望』（Deutsche Rundschau）との分析を行うことにより、ナチ時代の教育学の特殊性を明らかにすることを目的とする。ナチの思想は、ワイマール期の保守革命論との親和性が指摘されてきた。じっさい、ナチ党の指導層の中には保守革命論のサークルに所属していた者も認められる。またナチ教育学の領袖と見なされてきたクリーク、ギーゼらもそこに所属していた。しかし、保守革命論は明確な一つのビジョンを有する組織体とは異なり、その思想傾向は一様ではない。本論文においては、保守革命論からナチ期に至る思想傾向を辿り、その上で『ドイツ展望』の教育関係論文を検討することにより、保守革命論とナチ教育学との非連続性を明らかにした。そのさい、両者を区分するものが教養市民層の末裔としての保守革命論はに内在する質的感覚であることを指摘した。

キーワード：ワイマール、ナチ、保守革命論、ドイチェ・ルントシャウ、教養市民層

1　課題設定

保守革命論は20世紀初頭の青年運動に端を発し、1910年代から30年代にかけて雑誌を媒介として青年層を中心に広まった保守的な思想傾向である。その担い手は多くは没落教養市民層であり、急速な近代化に対するロマン主義的な批判、ワイマール体制に対する批判、在外ドイツ人問題などにおいて共通の関心を示すものの、組織としては明確な組織や体系的な理念を共有するものではなく、離合集散を繰り返す緩やかな人的ネットワークであった。とはいえ、保守革命論はワイマール期からナチ期にかけて、ドイツ教育学のみならずドイツ社会の思想的基盤を形成した運動であり、とりわけナチとの関わりにおいては等閑視できない運動である。

従来の教育学研究においては、保守革命論それ自体を取り上げた研究は多くない。しかし、改革教育学運動の研究においてしばしば指摘されてきたように（たとえば W.Scheibe（1969）、H.Röhrs（1980）、D.Benner（2003））、改革教育学運動の思想的起源は文化批判やドイツ青年運動に見出すことができる。その理論的指導者と仰がれたのは Paul de Lagarde（1827-1891）、Langbehn（1851-1907）、

教育学研究科　助教

Moeller van den Bruck（1876-1925）らであり、彼らはいずれも保守革命論の先駆者と見なされている（F. Stern（1961））。一方、ナチ期の代表的な教育学者の一人であるErnst Krieckも、Moeller van den Bruckと親密な関係を持ち、保守革命論の中でも保守的な傾向を有するタート・クライス（中心は雑誌Die Tatの編集者Hans Zehler）に属していたことが指摘されている（G.Müller（1978））。こうした観点からすると、「子どもから」をスローガンとして掲げ、相対的にリベラルな教育運動と解釈されてきた改革教育学運動も、「全体は個に優先する」という教条主義的なナチ的教育学も、保守革命論という同じ土壌に根ざしていると見ることもできる。したがって、20世紀前半におけるドイツ教育学の展開を考える時、その基盤にある保守革命論について立ち入った検討を行うことは必要不可欠な作業である。

本報告においては、保守革命論の一翼を担った総合雑誌Deutsche Rundschauを取り上げ、その思想的傾向と教育論ついて検証することを目的とする。Deutsche Rundschauは Julius Rodenbergによって1874年に創刊された総合雑誌――3ヶ月ごとに出版される季刊雑誌――であり、ドイツの政治、文学、文化に強い影響を与えた。ドイツの定期刊行雑誌の中でも最も成功した雑誌と考えられ、寄稿者にはドイツ語圏の代表的な文学者Theodor Fontane、Paul Heyse、Theodor Storm、Gottfried Keller、Thomas Mannらが含まれていた。また1920年代以降には、教育学者Gerhardt GieseやAdolf Reichweinらが、そして右派の論客Edgar Jungらが含まれていた。編集はRodenbergの死後、Bruno Hakeを経て、1919年にRudolf Pechel（1882-1961）に引き継がれ、このPechelの下でDeutsche Rundschauは保守革命論を代弁する雑誌と見なされるようになった。後のナチ時代には、Pechelは保守主義の側からナチ批判を展開し、1942年、Pechelが国家反逆罪により逮捕され、雑誌は休刊に追い込まれた。本報告では、Pechelが編集長を務めた1919年から1942年の記事の分析を行うことにより、20世紀前半のドイツにおける思想と教育論の基底を探る。

2　ワイマール期の保守革命論

⑴青年運動から保守革命論へ

保守革命論の起源については、戦後の早い段階でA. Mohler（1950）、K. Klemperer（1957）などが青年運動に求める解釈を提示している。こうした枠組みに基づき、ワイマール時代をカリスマ的小預言者たちの時代と解釈するH.カンツィク（1993）によれば、ワイマール時代は既存のあらゆる権威が失墜し、多くの小預言者たちが出現した時代であり、中央党はワイマール時代を通して議会で安定した議席を占めるものの、外交政策も内政政策もなく、文化政策もカトリック教会の権利と自由を守ることに終始した。既存の制度、文化、政治において生じた閉塞状況の中で、青年層は、家庭、学校、職場、教会などの社会制度から、空間的、内面的に距離を置き、自律的な運動を組織する。これがドイツ青年運動である。

ドイツ青年運動は分裂、再統合、新設を繰り返した。青年運動は多様な運動であったが、全体的に見れば、若者の多くは保守的な傾向を示していた。教会を危機に瀕したブルジョア階級の宗教と見なした若者は、教会から離れた新たな宗教、すなわち自然への回帰を重視した。そして、青年運

動は左派グループが分裂した後、民族主義的な団体が残り、それはゲルマン的、オカルト的なセクト、新宗教となる。もっとも急進的な民族主義団体は、ドイツ青年同盟であり、そこでは「ドイツという神的なもの」（H.J.Schoeps）が信仰されることになった。

(2)　保守革命論の思想的内容

保守革命論はワイマール時代を通じて、しかりとりわけワイマール末期に広くドイツに流布していた思想的傾向である。しかし、明確な理論的体系に支えられていたわけではない。その研究史においても、保守革命論の思想的特徴を「1914年の理念」、「社会ダーウィン主義」、「地政学」の理論的複合体と捉える H.Gerstenberger（1969）、これら3つの側面を止揚し、「反民主主義的思考」と「民族的イデオロギー」をその特徴と見なし、国家主義的なグループと同一のカテゴリーに分類する K.Sontheimer（1968）まで多様な解釈がなされている。とはいえ、そこには一定の傾向を見出すことができる。A.Mohler（1950, 1989）によれば、保守革命論には以下の特徴が見出される。

(a)反ヴェルサイユ体制＝反共和国。ここから反西欧のナショナリズムが生じる。

(b)反西欧のナショナリズムが、独自の社会主義論と結びつく。

(c)西欧のリベラリズム（議会主義、民主主義、個人主義、資本主義、インターナショナリズム）の克服を目指す「ドイツ的社会主義」を構想する。

(d)その社会主義は、マルクス主義的社会主義とは直接的関係はなく、階級の論理ではなく国民 Nation の論理によって基礎づけられる。

(e)その未来社会像は、基本的には初期資本主義的社会関係、あるいは身分的に編成された社会関係が望ましいとされた。

(f)しかし、帝政期の社会関係に復帰しようとする主張はなされず、労働者の進出を承認する。

保守革命論は、人間を根源において支え、生に意味を与える明確な思想的基盤をもたないまま社会の現実に対峙する青年層が、西欧市民社会の生み出したリベラリズムを受容することはできず、そこでドイツの伝統への回帰を求め、そのさいたんなる復古ではなく、伝統に根ざしつつ新たな社会秩序の構築――「社会主義」という用語を用いながら――を目指した運動と見ることができよう。不安的なワイマール期の社会を反映し、不安の中で新たな秩序構築に向けて自らを投げ出していく運動、確実なヴィジョンを描きだせず、根拠も目的もないまま自らを投企しつづける運動であった。

(3)保守革命論の担い手たち

保守革命論の担い手は、ワイマール期に顕著になる「プロレタリア的知識人」である。19世紀においては、教養市民層は医師、法律家、行政官僚、聖職者、大学教授、中等教員などのアカデミカーであった。彼らは文化を創造、維持し、既存の社会的・精神的秩序の再生産を越えて、精神の解放を果たすことが期待された。しかし、19世紀後半になると教養市民層の解体が進み、没落していく教養市民層から新型知識人が登場する。彼らは教養市民層としての教育を受けるが――しかし、その多くは学業を中断する――、古典主義的教養理念の体現者にはなりえず、また労働者とも異なるア

ウトサイダー的存在であった。

こうした疎外されたグループから、保守革命論の担い手が登場してくる。たとえば、Moeller van den Bruck、Langbehn、Paul de Lagarde らである。彼らはいずれも教養市民層の家庭に生まれ、古典的な教育を受けた。しかし、アカデミックな世界にとどまることはなく、批評活動を生業とした。彼らに共通して認められる傾向は、「ドイツ文化に深く根ざした、政治的に利用されやすい不満、本質的に非政治的な不満を政治の中へ進入」(F. Stern) させたこと、「ドイツ的なるもの」を喧伝したことである。

とくに Moeller van den Bruck は、雑誌『良心』Das Gewissen、サロンである「6月クラブ」Juni Klub などの活動を通じて、保守革命論運動において中心的な役割を果たすことになった。Moeller van den Bruck 自身は1925年に死去するが、保守革命論は Heinrich von Gleichen-Rußwurm らを中心とする「紳士クラブ」Herrnclub、同じく von Gleichen-Rußwurm の雑誌 Der Ring、Hans Zehler の雑誌 Die Tat を中心とする「タート・クライス」、さらに Rudolf Pechel の雑誌 Deutsche Rundschau へと引き継がれていく。

保守革命論は明確なヴィジョンとリーダーシップ、また強固な組織を有する運動体ではなく、「ドイツ的なるもの」「伝統」を嚮導概念として近代、自由主義、政党政治を批判し、社会体制を反転させようとする運動の方向性において共通点を見出せるものの、基本的には諸集団の緩やかな集合体として定義される (A.Moller)。Sontheimer によれば、保守革命論とナチとを連続的にとらえることに一定の留保をしているものの、保守革命論をナチの呼水ととらえている (K.Sontheimer、蔭山 (1986))。しかし、保守革命論をナチとの関わりから評価するならば、そこには両義性が認められる。すなわち、ナチにつながっていく線と保守思想を背景として反ナチ抵抗運動に発展していく線が認められる。

⑷保守革命論からナチ的教育学へ

カリスマ的指導者としての Moeller van den Bruck

Moeller van den Bruck は、1876年、ウエストファーレンのゾーリンゲンに生まれた。父はプロイセンの建設官僚であり、その家系はプロテスタントであり代々牧師を務めてきた市民層に属する。母はオランダのスペイン系市民である van den Bruck 家の出身であった。教養市民層の子弟として、Moeller van den Bruck は教育を受けるがギムナジウムを放校処分になっている。そのためドイツの大学に入る道は閉ざされた。

ギムナジウムを放校になった後、ライプツィヒ大学でヴィルヘルム・ブントの心理学の講義などを聴講したが、やがて文学的エッセーを書き始めることになった。その後、ベルリン、パリ、イタリア、北欧を転々としながら、美術評論、文芸批評を行うことになる。この時期、1914年にドストエフスキー全集を編纂し、ミュンヘンから出版した。F. Stern によれば、ドストエフスキーのドイツ思想に与えた衝撃の性格は、ほとんど Moeller van den Bruck によって形成されたものであった。

第一次世界大戦後、Moeller van den Bruck の関心は政治に向かうことになる。ドイツ人の特徴

である奉仕の精神――「最も高度なドイツ的および人間的自由」（PS, 33）――を失った「平均的な人間」を救済し、党派によって分断されたドイツを再び統一することが、Moeller van den Bruck の課題となった。1919年にはヴェルサイユ条約調印後、ヴェルサイユ条約に批判的な「6月クラブ」を結成し、その後数年間、Moeller van den Bruck はその中心人物となる。しかし、1925年に死去している。

Moeller van den Bruck は、教養市民層の家系に属していたが、既存の教育制度の中で知的訓練を受けたわけではなく、もっぱら独学で教養を身につけた人物であった。また不安定な批評活動――その活動は、初期の文芸評論から晩年の政治評論まで広がりをもつ――を中心に生活した「プロレタリア的知識人」の典型であり、国外での生活経験の長いアウトサイダーであった。しかし、1918年以降、ワイマール体制に批判的な広範な層を引きつけることになった。そしてその活動は、来るべきナチ支配にその「第三帝国」という名称を提供することになった。

Moeller van den Bruck の国民教育論

さて、Moeller van den Bruck が教育論について直接言及している史料は限られている。しかし、彼の議論全体が国民形成に関わる議論であり、その意味で Moeller van den Bruck の議論は教育論として読み解くこともできよう。

Moeller van den Bruck はドイツ民族を精神の民族と見なし、同時代人に哲学的な修養を求めた。その手引きとして執筆されたのが『ドイツ人』Die Deutschen（以下 Dt）である。1904年から1910年にかけて出版されたこの書物（全8巻）は、主として哲学者を中心に代表的なドイツ人の人と思想について記したものである。Moeller van den Bruck によれば、世界の歴史は「神話の時代」から「宗教の時代」を経て、宗教改革以後は「形而上学の時代」に入った。そこで、Moeller van den Bruck は代表的なドイツ人の業績を紹介することにより、国民に教会宗教に代替する形而上学を提供しようとした（Dt 2, 128）。Moeller van den Bruck の言う形而上学は、専門家を育成するための形而上学ではなく、読者に正しい世界観を生じさせるための形而上学であり、それを「現実性の形而上学」と呼んだ。Moeller van den Bruck がとくに重視するのは、カント、フィヒテ、シェリングである。またダーウィンとニーチェである。これらの思想家を組み合わせることにより、「無限の世界の法則性が経験的世界においても妥当性をもつ」（RuN, 3）ことを確信することができるようになる。

しかし、「現実性の形而上学」は哲学の復興に止まるものではない。それはドイツ人を一つの民族として形成する目的を持っていた。

> 個人の生を支配する生存をかけた闘争は、集団の生においても繰り返される。諸民族の個性は諸民族の個性に対立する。闘争の本質は、勝者があり、敗者があるということにある。闘争する者の一方はより強いもの、前へ進む者があり、他方で無力なもの、退く者があるということだ。（Dt 1, Ⅸ）

こうした世界的に諸民族の闘争が行われる時代においては、「統合された国家主義」が求められる。そのためには国民を統合しなければならない。そして国民統合の手がかりが「現実性の形而上学」なのである。

第一次世界大戦以前に執筆された『ドイツ人』において、社会ダーウィニズムの影響もあり、国内統一を図り、ドイツを強国へと作り替えていく Moeller van den Bruck の思想が表明されている。結果的には、国民の精神的統一を図る手段として「現実性の形而上学」は構想されたものであった。Moeller van den Bruck の国民教育論――その対象は青年層――は、個々の青年の修養、啓発にとどまらず、まさに国民国家を形成するための教育論であった。

「第三帝国」の構想

第一次世界大戦の後、Moeller van den Bruck の国家主義への傾倒はいっそう顕著になる。『第三帝国』Das Dritren Reich（1923年）（以下 DR）は Moeller van den Bruck の集大成とも言うべき代表作であり、そこでは理念型的に社会主義、自由主義、民主主義、プロレタリア、保守主義など、主に西欧リベラリズムを構成する当時の思想的傾向を取り上げて批判的検討を加えられ、最後に「保守主義」と「第三帝国」について論じられている。

Moeller van den Bruck は自由主義について次のように述べている。「自由主義とは志操を持たない自由である」（DR. 70）、「自由主義は文化を衰退させる。それは宗教を根絶する。それは祖国を破壊する。それは人間性の自己解体である」（DR. 80）、「知性主義によって自らを正当化する自由主義によって、世界大戦は起こった」（DR. 84）。Moeller van den Bruck において、自由主義は精神の自由とは関わりのないものであり、ドイツの伝統的な文化、宗教、そして祖国を解体し、さらには自由主義こそが世界大戦を引き起こした原因である、とされる。

自由主義によって誤った方向に進みつつある歴史に対していかに対峙すべきか。Moeller van den Bruck は、反動についても否定する。Moeller van den Bruck にとって反動とは、過去に対するノスタルジーに過ぎず、それは現実的に不可能であり、歴史の進行を止めることができない。その対極にあるのが革命である。しかし、革命はまったく新しい秩序の創設によってのみ歴史の進行を止めることができ、時代は救済されると考える。

これに対して保守主義は、民族の「根源」に立ち返ること、そしてその価値の実現をもとめる。「保守主義は根源を直観することである」（DR. 200）。しかし、反動とは異なり、過去への退行ではない。「保守主義は、ドイツ国民にとって、将来の形式を見出すことを意味する」（DR. 215）。つまり、保守主義は、かつて歴史の中に存在した根源へ立ち返り、そこから現実を照射し、将来を切りひらく。「反動的な人間は、後ろに向かって生きる。事柄の只中に立つ保守的な人間は、後ろに向かって生きると同時に前に向かって生きる。後ろから前に向かって生きるのである」（DR. 216）。

ここで問題になるのは、「根源」である。Moeller van den Bruck はキリスト教的な価値観を切り捨て、ドイツにおける帝国の伝統に着目する。そして帝国の伝統を未来に投影した「第三帝国」を構想するに至る。Moeller van den Bruck によれば、「第三帝国」は「価値の共同体」である。しかしそ

の価値の内容、またその根拠については明確な記述は欠いている。つまり、「第三帝国」下の人間がコミットすべき価値およびその根拠については規定されないままである。強いて言うならば、「ドイツ的なるもの」への回帰である。形式的には、「永久発生」、「永久生成」、「永久継続」を通して、「第三帝国」を階級闘争のない共同体へと形成し、また外に対しては「世界宣教」、「派遣思想」という使命を課しうる共同体へと形成することが掲げられるものの、その内容は繰り返し「伝統」を訴えるに過ぎない空虚なものであったと言えよう。

Moeller van den Bruck の「第三帝国」共同体論には、形式はあるものの、内容は空虚と言って過言ではない。したがって、この理念に従う人間に求められることは、「ドイツ的なるもの」に基づき、個人的利益を共同体の公共善へ従属させる「第三帝国」の実現に邁進することであり、それは実質的には虚無に向かって自らを投企していくことに他ならない。Moeller van den Bruck 自身は、「第三帝国」は実現不可能なプログラムとする（DR. 244）。しかし、Moeller van den Bruck の死後、10年足らずの間に「第三帝国」はナチによって実現されることになる。

Moeller van den Bruck から Krieck へ

G.Müller によれば、Krieck は1917年頃からたびたびベルリンに出かけ、保守革命論のグループと接触を持つようになった。Krieck がその著書『学問の革命』（1920）を送った後、二人の関係は親密になり、その関係は Moeller van den Bruck の死まで続いた。Krieck は Moeller van den Bruck と「第三帝国」という言葉を共有することになる。

Krieck はすでに『ドイツの国家理想』（1917）において、「第三帝国」という言葉を用いて議論を展開している。Krieck によれば、人間には絶対的な根源があり、その根源を認識することから内面的な自立、人間性のへの向上心が生じ、それが国民意識の基礎となる。そして国民意識の形成を通して、「第三帝国」は構築される。この立場から Krieck は、「第三帝国」における教育を構想していく。しかし、Krieck の教育学は個人を前提とするのではなく、ドイツ的な共同体を前提としている。なぜなら、人間は抽象的な個人として存在するのではなく、共同体の中に埋め込まれているからである。

Moeller van den Bruck と Krieck の「第三帝国」の共通点は、現実におけるさまざまな対立や葛藤――たとえば階級や党派の対立――を弁証法的に統合する共同体であり、外に対してはドイツ的な共同体という価値観を「宣教」していく使命を担っている点である。さらに、「第三帝国」はすでに完成された形で存在するのではなく、たえず生成するものと捉えられている点である。両者は、基本的な骨格において類似性を示している。

Moeller van den Bruck は1925年に自殺する。しかしその思想は、ワイマール期青年層を中心に広い影響力を持った。そして Krieck によって継承され、ナチ期の教育学を構築していくことになった。

3　総合雑誌 Deutsche Rundschau

抵抗の雑誌 Deutsche Rundschau

上述の通り、保守革命論は多様な側面を持つ思想運動である。そこには前節で記した Moeller van den Bruck からタート・クライスを経て Krieck におけるナチ的教育学へと展開する線と、同様に Moeller van den Bruck の影響を受けつつも、保守的な陣営からの反ナチ抵抗運動へとつながる線も認められる。その線が Rudolf Pechel の Deutsche Rundschau である。

もっとも、戦後、獄中から解放された Pechel が出版した *Deutscher Widerstand*（1947）によれば、Pechel はすでに1922年の最初の出会いからヒトラーに対して反感を持ち、それ以降、首尾一貫して反ナチの態度を貫いたとされるものの、彼の編集した Deutsche Rundschau は多様な、幅の広いライターを抱えており、当然掲載論文の論調も幅が広く、反ナチ抵抗路線が明確に読み取れるわけではない。

しかし、たとえば1941年1月－3月号における Pechel の論文「権力の魔力」Dämonie der Macht は、マキャベリとトマス・モアとを取り上げ、「マキャベリは、権力の必要性についての鉄則とはあらゆる自由のための前提であると宣言していた」（DR. Nr.266. S. 10）、また「トマス・モアによれば、権力行使が許されるのは、合法性と自由に奉仕する場合のみである」（DR. Nr.266. S.10）と述べ、権力を自由を擁護するものとして定義し、「悪しき、輝ける権力の魔力は蛾のように光に引き寄せられ、その中で焼死するに違いない」と述べている。思想的ないし文学的な表現形式を取っているものの、ここには痛烈な権力批判を読み取ることもできよう。

また1942年1月 -3月号における論文（DR. Nr.270. S10）においてナチ宣伝省のゲッペルス批判を行い、この論文がイギリス BBC で放送されたことから国家反逆罪で逮捕され、1945年4月11日まで身柄を拘束された。この間、1944年7月20日事件で、彼の友人たちは処刑されている。こうした状況からすれば、少なくとも Pechel 自身は、出版を通じた反ナチ抵抗運動の担い手であったと言えるだろう。

(1) 編集者としての Rudolf Pechel

Mauersberger（1971）は、Rudolf Pechel の思想形成過程を、3つの段階に分けて説明している。第1段階は生い立ちと編集者としての就職である。第2段階は青年保守思想の深化の過程であり、ここには第一次世界大戦への参戦が含まれている。そして第3段階は保守革命論との関わりである。Deutsche Rundschau の編集作業を行いながら、Pechel は Moeller van den Bruck の周囲に集まった「6月クラブ」を中心とする保守革命サークルに接近し、保守革命論者としての自覚と思想を深めていく。Mauersberger によれば、編集者としての Pechel にとって決定的でかつ根源的な体験となったのは、第一世界大戦における塹壕体験であった。

「1914年の理念」と塹壕体験

ドイツの大学教授たちによる「1914年の理念」は、戦争に対して積極的な意味を付与し、国民的な

感情と政治思想との統一をもたらした。Pechelにとって「1914年の理念」は、さしあたり「戦争は堪えがたい現状からの解放、ついに可能となった、市民的存在という退屈さからの逃避」を意味した。しかし「解放」「逃避」という消極的な観念は、彼自身の「塹壕体験」を通して改造され、積極的な観念としてPechel自身の中において受肉し、身体化されることになる。すなわち、「共同体が人間存在の前提条件であるとの認識」、「国家と社会の構成原理としての国民的社会主義（nationale Sozialismus）」という観念である。青年保守層には「ドイツ的社会主義」という観念が広まるが、それは国民の統一、すなわち政党、階級、国民の間にある階層を止揚する有機的な国家組織の形成を意味するものであり、「前線の共同体」内部における体験へと還元されなければ理解できないものである（Mauersberger, S.21）。

在外ドイツ人問題

第一次世界大戦後のPechelにおけるもう一つの重要な思想的契機として、在外ドイツ人保護問題が挙げられる。第一次世界大戦において形成されたドイツ国民の連帯を基盤とする愛国心は、「地政学」の擁護者であるKarl Hausfoferとの出会いを通して強化された。Pechelはすでに1911年の論文「故郷の鐘」（DR. Nr.148 S.155f）において、ハンガリーにおけるドイツ人問題に言及しており、またその後のDeutsche Rundschauにおいては在外ドイツ人問題に関する論文数は際だって多い。もっともこれらの論文は、在外ドイツ人保護は、軍事的な要素を含むものではなく、もっぱら「精神的、経済的、そしてとりわけ志操的起源」を問うものであった（Mauersberger, S.28）。じっさい、Deutsche Rundschauにおける在外ドイツ人問題に関わる論文は、外国におけるドイツ人共同体における言語、習慣、信仰、教育などに関する現況報告が中心であり、そこには軍事的な要素は認められないし、社会ダーウィニズムや優生学的な観点もきわめて希薄である。むしろ、在外ドイツ人のあり方を通して、ドイツ人であることの意味を問い直していたと言えよう。

なお、Deutsche Rundschauの一つの特徴は豊富な国際情報である。在外ドイツ人問題ばかりではなく、Reichweinらによる極東の情報レポートも散見される。

保守革命論との関わり

Mauersbergerによれば、Rechelと保守革命論グループとの関わりについて1910年代に始まり、1920年に設立されたMoeller van den Bruck周辺に集まった「6月クラブ」――ワイマール体制を擁護する左派の「11月クラブ」に対抗し、ベルサイユ条約の締結された6月にちなんで「6月クラブ」と命名――から大きな影響を受けたことを指摘している。「6月クラブ」との詳細な関わりについては史料的には明らかにできないものの、Pechelは1935年にMoeller van den Bruckの没後10年を記念して「Moeller van den Bruck, zu seinem 10. Todestag」をDeutsche Allgemeine Zeitung（1935年5月30日）に寄稿している。この記事によれば、「Moellerは私にとって、他の友人とは異なり、存在の原理（Seins-Prinzip）が最も強力に受肉した人物であった。彼は存在し、働きかけていた。彼はそこにいて、言葉によって議論を遮ることはなかったが、なんらかの方法で議論を支配した。彼

はすべてのサークルの中で最も情熱的な政治家であり、その情熱の力が彼に一目置かせたのである」とし、Moeller van den Bruck のカリスマ的な人格に対する敬意が表明されている。

Moeller van den Bruck の思考形式については上述したように、ワイマール体制を中心として既存のあらゆる価値を捨て、根源的なものへの回帰を媒介として、現実の変革を志向するものである。こうした思考形式は、Pechel のワイマール体制、政党政治に対する批判として継承されている。たとえば1920年の論文「それにもかかわらず！」(Und dennoch!) において、Pechel は政党政治を批判し、次のように書いている。「何百万もの人々が一人に独裁者に従う心の準備ができている。独裁者は政党色なしに、確実に労働と秩序の政治を築くであろう。君主制か共和制、民主主義か自由か、それは重要ではない。重要なのはドイツが生きること (Deutschlands Leben) だ。独裁はいかなる目的も許さず、手段であることが許されている。・・・それは右による独裁でも、左による独裁でもなく、ドイツに対する愛の独裁であろう」(DR. Nr.182. S.47)。エキセントリックな表現であるが、中心的なメッセージは独裁者待望論ではなく、政治の本質を見失った政党政治に対する批判である。ポイントは、根源としての「ドイツが生きること」への注視と「ドイツに対する愛」の再発見である。

なお、1920年代から30年代にかけて、Pechel は論争を通して多様な人間関係を結んでいく。たとえば、「新しい中世」を標榜した保守革命論の論客 Edgar Jung は Deutsche Rundschau を主要な執筆者となった (小野 (2004))。Jung は1934年、反政府的思想を理由として逮捕され、レーム一揆との関わりで処刑された。この事件の後、Pechel は絶えず秘密警察に監視されるようになった。またこの時期、後にナチ体制に対する市民的抵抗グループの Carl Friedrich Goerderler、また1944年7月20日事件に加わった Friedrich Olbricht らとも関係を深めている。

(3) Deutsch Rundschau における教育論

Moller van den Bruck の場合

Pechel が Deutsch Rundschau の編集を引き受けた1919年以降で、注目すべき論文は、Pechel 自身が影響を受けた Moeller van den Bruck の論文である。Moeller van den Bruck は二つの長大な論文を寄稿している。「西欧の没落」(DR. Nr.184. 1920) と「テオドール・ドイプラーと北極光の理念」(DR. Nr.186, 1921) である。

「西欧の没落」は、シュペングラーの『西欧の没落』(1918 − 1922) に対する評論である。Moeller van den Bruck は、文明と文化、歴史主義、文明の創造と破壊など、シュペングラーの中心的な議論を紹介しながら、西欧の没落に対する疑義を提出している。つまり、「西欧」が統一的な概念でないこと、ドイツが南と北、東と西の間に位置していること、そしてドイツが独自の歴史を持っていることを強調する。結論部分で Moeller van den Bruck は次のように述べている。

> 勝者は常に勝利に拘泥する。彼は世界戦争の結果が創り出した強制にしたがって行動しなければならない。勝者はベルサイユの紙をかざし、最終的に無歴史的となった世界、勝者にとってそのように都合の良い世界を要求する。歴史の永遠化に対して、勝者はこれらの諸民族の結びつきの予定的調和を

見つけ出した。それは勝者の被征服者に対する持続的な支配を保証するものである。・・・これに対して、外的には拘束されたように見える被征服者は自由である。確かに被征服者は法的権利を剥奪されているものの、それでも自由である。被征服者は、勝者が彼に指し示したあらゆる運動に政治的に従わなければならない。しかし被征服者は、それでもなお政治を歴史と取り違える必要はない。被征服者は、一度たりとも政治の出来事を歴史の出来事と見なすことを強制されたことがない。・・・被征服者は、強力な集結、技術的な浪費、そして全大陸の動因があって初めて・・・勝利をもたらすことに成功することを十分に意識している。被征服者は今や、表面的なものと並んで進行し、歴史の悪意に復讐する日を準備する出来事の隠れた影響を待望する測り知れない空間を持っている。・・・今や被征服者は、もはや何も失うものを持たず、ただ獲得するだけであり、大胆不敵な表象を持つことが許されている。

現実の「政治」においてはベルサイユ体制下に置かれているものの、その支配は「歴史」にまで及ばず、そしてその「歴史」において、ドイツはなお自由を保持しているとする。ここには、「歴史」というドイツ国民の内面性を媒介として、将来を待望する思考形式を読み取ることができる。

「テオドール・ドイプラーと北極光の理念」は、詩人テオドール・ドイプラー（1874－1934）の『北極光』（Nordlicht, 1910）の評論である。ドイプラーはドイツ表現主義たちに熱狂的に受け入れられた詩人であり、その影響は政治哲学者Carl Schmittがドイプラーに関する評論を公刊している（Carl Schmitt, *Theodor Däublers 'Nordlicht' - Drei Studien über die Elemente, den Geist und die Aktualität des Werkes.* München 1916）ように、文芸の領域だけにとどまらない。

この論文において、Moeller van den Bruckは『北極光』を黙示的な書物とし、「いたるところで、この時代から永遠に向かって光を放つ白魔術の現象が輝いている」とする。論考は、ドイプラーにおける近代科学の批判から始まり、創造、福音、神話、精神、時、象徴という観点から『北極光』に解釈を加えている。こうした宗教的な用語を用いた解釈の観点は、Moeller van den Bruckの合理的な世界を越え、存在のより根源的な意味を直観しようとする精神構造の表出である。たとえば、冒頭には以下の文章が置かれている。

世界はいつも神秘的になる。世界はそれ自体になる。占星術は天文学よりも真実である。錬金術は化学よりも真実である。形而上学は物理学よりも真実である。そして最も真実なものは詩人である。・・・偉大な自然科学はいつも偉大な神話である。それは自然科学を閉め出さない。それは自然科学を包み込んでいる。われわれは観察するときよりも、直観するとき、より多く見るのである。われわれは個を観察する。しかしわれわれは全体を観るのである。

以上のように、Moeller van den Bruckの論文には、外圧によって奪い取ることのできない内的な自由――しかもこの内的自由はドイツ国民の「歴史」であり、また将来を築く礎石となる――に対する確信と期待、また合理的な思惟によって掬い取ることのできない存在を直観的に把握しようと

する思考形式が認められる。こうした思考形式には、存在の深みを記述しようとする生の哲学（Lebensphilosophie）に通底する響きがあり、またその一方で非合理的なショーヴィニズムにつながる可能性も読み取ることができ、彼の議論がきわめて両義的であることが理解できる。

シュタイナーの社会有機体三区分論

「社会有機体の三区分」（DR. Nr.183, 1920）は、Erich von Koebke によるルドルフ・シュタイナーの『社会有機体の三区分』を取り上げた書評論文である。シュタイナーの著書が公刊されたのは1919年であり、比較的早い時期の書評である。この時期、シュタイナーは著作活動と並んで、シュトゥットガルトにおいて協会の設立、雑誌の刊行、そして自由ヴァルドル学校を開設するなど積極的な展開しており、少なからぬ批判もあった。

この書評論文は、シュタイナーの思想が登場する必然性から説き起こし、彼の思想的基盤としての神智学、人智学に触れ、そしてシュタイナーの思想と行動が党派政治的ではないこと確認した上で、『社会有機体』における三区分について、テキストに基づいた紹介を行っている。その論調は、シュタイナーの思想と実践に対する全面的な支持である。とくに、シュタイナーの実践が、特定の政治的な目的を持っていない点が強調されている。

> すでに本論文の冒頭で論じたように、非常に精神的に豊かなシュタイナーの思想の歩みに対して、またそれらによってもたらされた運動に対して注意を払わぬまま見過ごすこと、あるいは［シュタイナーの］運動を何らかの党派政治的目的に利用することは誤りであろう。この運動の根底にある思想は、たとえこの運動自体が多くの側面によって、時として党派政治的な目的に――不当にも――利用されようとも、党派政治的には中立的である。（DR. Nr.183, S.102）

この書評論文でも述べられているように、とくにシュタイナーの著作の最後の章においては、社会有機体の国際的関係が取り上げられている。「シュタイナーによれば、三区分は国際的関係へと拡張されなければならない」。神智学、人智学に根ざし、さらに社会有機体の国際的な拡がりを築こうとするシュタイナーの思想と運動は、少なくとも Moeller van den Bruck の根源的なもの、ドイツ的なものへと内向的に回帰して行く思想傾向とベクトルを異にしている。それにも関わらず、この書評論文ではシュタイナーに対する全面的な支持が表明されている。

以上のように、1920年代の Deutsche Rundschau は――ここでは範例的に2つのケースしか取り上げることができなかったが――、基本的には保守革命論を基調としながらも、その論調は一様ではなく、幅広い情報提供が行われていた。また上述したように、たとえば「アメリカ合衆国における公民教育」（Der Staatsbürgerliche Erziehung in den Verrinigten Staaten）（DR. Nr.208, 1926）、「ポーランドにおけるドイツ人学校の発展」（Vom Grenz- und Auslanddeutschen Schulwesens im ehemals preußischen Teilgebiet Polens innerhalb eines Jahres）（DR. Nr.208, 1926）など、海外教育情報も散見される。こうした論者と論調の多様性、国際的な拡がりを持つ情報提供は、1930年代以

降にも継承されていくことになる。

Gerhardt Giese の場合

Deutsch Rundschau における数少ない教育関係論文を中心的に執筆していたのは、Gerhardt Giese である。Hegel 研究者であった Giese は、Krieck や A.Baeumler とならぶナチ的教育学者と見られている（宮田（1991）、竹中（1987））。ここではまず、Giese の論考を確認しておこう。

Giese の論文として確認できたものは、1930年から1933年にかけて掲載された5つの論文である。1930年の「国家志操の本質」（DR. Nr.225. S.193f.）は、国家の機能として5つの側面、すなわち統治、社会（Gesellschaft）としての国家、財政政策、地理的空間の確保、そして民族（Volk）を掲げている。これら5つの側面の要となるのは民族であり、それは言語、歴史、文化から成立しており、この民族なくして国家は存在しないとする。そして個々の市民の胸中にある倫理的な意志が国家志操を形成する。国家志操は超越的な倫理性を帯びており、したがって「「保守的」、「自由主義的」、「社会主義的」、「君主制的」、「共和制的」な国家志操について語ることはできない」（DR. Nr.225 S.198）。こうした現実的に政治、国家を動かしている党派性を越えた国家志操を形成するのが教育の課題となる。したがって、教育においては、子どもたちに特定の見解や確信を強いることがあってはならず、理念のとしての国家のために教育は行われるべきである。しかしその一方で、Giese は教育の仕事は、理念としての国家に奉仕するものなのか、あるいは現実の国家に奉仕するものなのかという問いを立て、現実の国家に奉仕することが教育の課題であるとする。

ワイマールにおける混乱の象徴としての政党政治に対する批判を、抽象的な概念としての「民族」によって止揚し、教育もまた党派性を越えて理念としての国家に仕えるべきものであるとする論理は、根源的なるものを媒介として現実世界と対峙する Moeller van den Bruck や Pechel の思考形式にも通じるものである。しかし Giese は、論文の結論において、教育における現実の国家への奉仕を説いている。これが Hegel 学者としての Giese のオリジナルな観点であろう。この結論に議論は反転され、「理念」と「現実」とが渾然一体となり、「現実」の中に超越的契機が取り込まれることになる。そこでは、「理念」から「現実」を批判的に照射する視点は確保されなくなる。

「理念」と「現実」との弁証法的止揚は、1933年1月 -3月号における「国家危機から逃れる道：指導者（Führer）としての Hegel」（DR. Nr.234. S.6f）にも認められる。「われわれが1930年の春以来体験してきたことは、議会的＝民主的システムの不名誉な崩壊であり、政党国家の漸進的な克服であり、そして自立的な、超政党的な、強力な国家指導がより鮮明に形成されてきたことである。同時にわれわれが観察したのは、事実上の国家の構造転換とともにわれわれの哲学的、法律的な国家論が完全に作り変えられてきたことである。・・・われわれは「多元的政党国家」の欠如を認識し、「権威主義的国家」を要求した。こうした関連において、とりわけ重要なのは、「官憲」（Obrigkeit）としての国家に対する理解を示す政治神学の再興である」（DR. Nr.234. S.6）。ここにはナチ政権に対する留保はなく、むしろ初期ヘーゲルや国家哲学を援用しながら、ナチ政権を正当化する論理を探っている。

なお、この論文以降、Giese の論文は Deutsche Rundschau には見られない。

Paul Fechter の場合

1936年10月－12月号における Paul Fechter の「古い教育の終焉」(DR. Nr.249. S.115f) は、古典的な人文主義的教育が損なわれていくことに対することへの危機感を表明した論文である。Fechter は1880年に生まれ、エアランゲン大学で学位を取得した後、Dresdner Neuesten Nachrichten、Vossische Zeitung,Deutsche Allgemeine Zeitung などの編集に携わり、さらに1933年からはPechelとともにDeutsche Rundschauの編集に携わった。そして1938年にはベルリンの「水曜クラブ」に加わっている。

さて、Fechter はこの論文において、「ドイツ的な人間教育とそれによるドイツ的な文化感情、ドイツ的な文化表象は、その根本において、ドイツの精神的な存在であるあの偉大な古典時代にしっかりと結びつけられていた。人間の本質と人間の教育がひたすら精神世界の領域から規定され、形成されることができた時代である」。古典的な文化財を青年たちに伝え、教える教育こそが、教育の本来の課題であったとする。もちろん、Fechter 自身の受けた人文主義的な教育の中にも物理学や数学などの教科は存在した。しかし科学の急速な進展により、学校教育における教育も専門化が浸透し、教育における全体性は損なわれた。Fechter は、青年を全体性へと教育するため学校は未だ作られていないが、かつてのギムナジウムと同様な教育的機能を備えた学校の出現を望んでいる。

一見すると平板な論調であり、具体的な新しい学校のイメージは全く語られておらず、内容の乏しい論文と思われる。この論文の書かれた当時、ナチによる全面的な教育制度改革が構想されており、ギムナジウムについても年限短縮を伴う改革の準備が進められていた。その先鞭となったのが1935年3月15日の訓令「選抜について」――遺伝学と民族学教授の目的・目標は、科学的な基礎を越えて専門・生活の全ての学科に先だって教えるべきこと――である。そして同年3月27日の訓令により、ギムナジウムへの進学の際の選抜を強化し、性格と肉体の状態を、知性より重視することが明確にされた (Nyssen (1979))。こうした知識よりも身体を重視するナチの教育政策と Fechter の古典的教育論とを対比すると、ナチ的世界観に基づく教育論とは異なり、教養市民層の末裔としての保守革命論の特色が浮かび上がってくるであろう。

4　むすび

保守革命論は、ワイマールからナチにかけて広まった思想傾向であり、Sontheimer によればナチズムとは一線を画するものの、「ナチの呼び水」と位置づけられている。じっさい、「第三帝国」という言葉は、保守革命論の中心的な人物と目される Moeller van den Bruck が使用した言葉であり、また根源的なもの、ないしドイツ的なものを媒介としたワイマール体制批判もナチとの親和性を見出すことができる。さらに、Moeller van den Bruck の周辺にいた Krieck はナチ的教育学者として活躍することになる。

しかし、同じ保守革命論の陣営に属した Rudolf Pechel とその雑誌 Deutsche Rundschau の場合、

保守的ではあるものの、ナチとは異なる世界観を有していた。Deutsche Rundschau のライターたちの中には、Giese のように親ナチ的思想家も含まれていたが、Pechel を初めとして Jung や Fechter のように反ナチ運動に関わった人物も少なくない。さらに詳細な雑誌記事分析が必要であるが、保守革命論の中に反ナチ抵抗運動の理論的可能性を見出すことができる。

Gerstenberger は、保守革命論の特徴として「1914年の理念」、「社会ダーウィン主義」、「地政学」の3点を掲げている。この保守革命論の理念型に照らして Pechel の思想的特徴を整理すると、(1)「1914年の理念」は塹壕体験を通して、国民的連帯としての「社会主義」に発展し、偏狭なナショナリズムにはつながらなかった。(2)「社会ダーウィン主義」は少なくとも前面には出ていない。論文「権力の魔力」に見られるように、人間における自由を擁護しており、それは古典的リベラリズムに他ならない。(3)「地政学」もドイツ人としての根源を探るものであり、軍事的なニュアンスは強くない。たしかにワイマールの政党政治、議会政治には批判的な見解を示しているが、それは根源的なものとしての「ドイツの生」を汲み尽くした体制、政治が実現できていないからである。ここには「全体が個に優先する」というナチ的教条主義は見られない。

Deutsche Rundschau における教育論はきわめて限られており、広く人間形成論として読み解く必要がある。限られた教育論においては、Giese は「民族」概念によりワイマール体制の矛盾を克服し、理念としての国家に向けた国民教育を論じているが、「理念」と「現実」とを止揚するにより、限りなく現実としての国家を前提とした教育論である。これに対して、古典的な人文主義的教育論である Fechter の場合、間接的な形でナチ的世界観に基づく反知性主義的な教育論を退けたと考えることもできる。こうした観点からすると、Deutsche Rundschau には、ナチとの関わりにおいて相対立する教育論が採録されていたが、Pechel の盟友である Fechter の論理には、没落したとはいえ、教養市民層としての矜持が見られ、これはナチとは明らかに異なる論理であった。

保守革命論は本質的に保守的であるものの、Mohler の指摘したように明確な思想運動ではなく、多様な思想を包摂しながら展開した運動である。それらは無条件にナチへと流れ込む思想ではなく、微妙な差異を含みつつも全体主義に対する抵抗の可能性を汲み取ることもできよう。

【参考文献】

Pechel, Rudolf, *Deutsche Rundschau, Acht Jahrzehnte deutschen Geisteslebens,* Hamburg, 1961.

Pechel, Rudolf, *Deutsche Widerstand,* Zürich, 1947.

Mauersberger, Volkers; *Rudolf Pechel und die 》Deutsche Rundschau《. Eine Studie zur konservativ-revolutionären Publizistik in der Weimarer Republik（1918-1933）*, Bermen, 1971.

Stern, Fritz, *The politics of cultural despair : a study in the rise of the Germanic ideology,* Berkley, 1961.　中道寿一訳『文化的絶望の政治学』．三嶺書房．1988年.

Sontheimer, Kurt, *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933.* München, 1962.

ゾントハイマー．河島幸夫・脇圭平訳『ワイマール共和国の政治思想』．ミネルヴァ書房．1976年.

Schoeps,Hans-Joachim *Zeitgeist im Wandel, Bd. 2. Zeitgeist der Weimarer Republik.* Stuttgart, 1968.

Armin Mohler, *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932,* Darmstadt, 1989.

Klemens von Klemperer, *Konservative Bewegungen: zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus,* Muenchen, 1957.

Klemens von Klemperer, *Germany's New Consevatism. Its history and dilemma in the twentieth century,* Princeton, 1957.

Gerstenberger, Heide, *Der revolutionaere Konservatismus: ein Beitrag zur Analyse des Liberalismus,* Berlin, 1969.

Schwierskott, Hans-Joachim, *Arthur Moeller van den Bruck und der revolutionäre Nationalismus in der Weimarer Republik,* Göttingen, 1962.

Michel Grunewald, *Moeller van den Brucks Geschichtsphilosophie,* Peter Lang, 2001.

Gerhard Müller, *Ernst Krieck und die nationalsozialistische Wissenschaftsreform,* Beltz, 1978.

Ernst Krieck, *Die deutsche Staatsidee, Ihre Geburt aus dem Erziehungs- und Entwicklungsgedanken,* Jena, 1917.

Nyssen, Elke, *Schule im Nationalsozialismus,* Heidelberg, 1979.

Moeller van den Bruck, Arthur, *Die Deutschen. Unsere Menschengeschichte.* 8 Bände 1904-1910.

Der preußische Stil. München, 1916.

Das Recht der jungen Völker. München, 1919.

Das dritten Reich. Berlin, 1926.

Das Recht der jungen Völker. Berlin, 1932.

Sozialismus und Außenpolitik. Berlin, 1933.

宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』．岩波書店．1991年．

対馬達雄『ナチズム・抵抗運動・戦後教育』．昭和堂．2006年．

対馬達雄「「市民的」抵抗グループのナチズム観：運動課題としての《覚醒》から《人間形成》へ」．秋田大学教育文化学部『研究紀要　教育科学』58．2003年．

竹中暉雄『ヘルバルト主義教育学：その政治的役割』．勁草書房．1987年．

蔭山宏『ワイマール文化とファシズム』みすず書房．1986年．

小野清美『保守革命とナチズム　E・J・ユングの思想とワイマル末期の政治』．名古屋大学出版会．2004年．

フーベルト・カンツィク『ヴァイマル共和国の宗教史と精神史』．お茶の水書房．1993年．

Die Erziehungsgedanke bei der konservativen Revolution

: eine Analyse der 'Deutsche Rundschau'

Yoshifumi SHIMIZU
（Assistant Professor, Graduate School of Education, Tohoku Universität）

In dieser Abhandlung will ich die Beziehung zwischen die Gendanke bei der konservative Revolution and die Erziehungsgedanke beim nationalsozialistischen Pädagogediskutieren. Die nationalsozialistische Pädagoge, wie Ernst Krieck und Gerhardt Giese, hat eine tiefe Kontakt zur Konservativer Revolution in der Weimarer Zeit. Aber es ist noch nicht erklärt, was für eine Beziehung sie gahabt hatte.

Die konservative Revolution hatte die jüngere Generation in der Weimarer Zeit faziniert, die eine negative Tendenz gegen der Weimarer Verfassung hatte. Aber sie war nicht eine Bewegung, die eine klare Neigung und strenge Organization gemeisam gehalten hatte. Aus dieser Kreis hatte die nationalsozialistische Pädagoge, wie Ernst Krieck und Gerhardt Giese, erwucht. In dieser Abhandlung will ich die konservative Revolution und besonders die Zeitschrift 'Deutsche Rundschau' feststellen. Diese Zeitschrift hatte unter der Leitung Rudolf Pechels, später 1943 als der Widerstandkämpfer verhaftet wurde, als relativ konservative Neigung gehabt. In 'Deutsch Rundschau' kann man die Name Gerhardt Giese finden, der hauptsätzlich pädagogische Abhandlungen geschrieben hatte. An andere Seite kann man einige kritische Abhandlung gegen die Erziehungspolitik der Nazi; zum Beispiel Paul Fechter.

In der Bewegung der konsevativen Revolution kann man die zwei Möglichkiet lesen. Eine ist Widerstandgedanke und andere ist Nationalsozialismus. Daher wir müssen noch konkreter Analysis betreibe.

Schlüssel Wort : Weimar, Nationalsozialismus, konsevative Revolution, Deutsche Rundschau